

2016 年度入学式 学長式辞

今日の良き日、ここに埼玉大学入学式を迎えられた 1,689 名の新入生の皆さん、入学おめでとうございます。埼玉大学の役員、教員 470 名、職員 220 名、そして 7,000 名の在学生を代表して、皆さんの入学を心から歓迎します。また、式典にご参列下さいましたご家族の皆様方に対しましても、心からお慶びを申し上げます。

埼玉大学構内は、今朝、常緑樹の濃い緑の中、名残惜しそうに残る桜の花に代わって、櫻をはじめとした木々が柔らかな淡い緑を一気に芽吹いています。私の大好きな、この美しい埼玉大学キャンパスは、私の恩師であり、第 5 代学長を務められた岡本舜三先生が 40 年前に、荒川河川敷、首都圏埼玉の地に植えられた木々が育ってできたものです。時の流れという時間軸の重みと、初動という時間軸の原点の大切さを教えてくれます。皆さんは今、それぞれに決意も新たに大学での生活を思い描いていることと思います。今日の、入学という節目を一つの原点として大切にし、新たな時間軸に沿って順調に歩みを進め、大きく成長して行って下さい。

私は 1971 年に当時の理工学部建設基礎工学科に入学し、大学生としての 4 年間で埼玉大学で過ごしています。その私が学長になって 2 年が過ぎましたが、母校、埼玉大学をより一層輝かせたいとの想いは強くなるばかりです。また、学長が直接、一堂に会した皆さん全員にお話しすることが出来るのは、この入学式と 4 年後の卒業式だけです。それを思うと、この式辞の重みを実感せざるを得ません。入学生に贈る言葉を並べるまえに、埼玉大学の状況や将来像、そして大学への学長の想いをまずお話ししたく思います。

埼玉大学の掲げるビジョンは「埼玉大学 All in One Campus at 首都圏埼玉～多様性と融合の具現化」。埼玉大学は、知の府としての基盤強化と埼玉大学の個性化、これら二つを主軸として、より一層存在感を増すよう機能強化を進めます。

第 1 の軸は、大学の主たる使命が知の創造と継承であることをしっかり据え、これまでに進めてきた、研究と人材育成という知の府としての基盤の強化です。研究力強化については、埼玉大学の強みを有する研究領域として、ライフ・ナノバイオ領域、グリーン・環境領域、感性認知支援領域を選び、研究の国際展開を可能とする体制として戦略的研究部門を整備しました。その結果として研究は着実に進み成果を挙げつつあります。人材育成力強化についても計画は順調に進み、昨年 4 月には人社系大学院を一本化し、人文社会科学研究科に拡充してグローバルリーダーの育成基盤の整備を進めるとともに、この 4 月には実践的に力量ある教員を養成する教職大学院を設置しました。

第 2 の軸は、埼玉県を中心とした首都圏の活性化の中核的拠点として、その役割を積極的に担うことによる埼玉大学の個性化です。産学官の連携によって、知の具体的な活用を促進し、現代が抱える諸課題の解決を図るとともに、地域社会とのコミュニケーションを積極的に図って、そのニーズに応じた人材を育成します。文系、理系、教員養成系の 5 学部全てが首都圏埼玉の 1 キャンパスに集まり、日本人学生、留学生、社会人といった多様な学生が集う利点を活かして、「埼玉大学 All in One Campus at 首都圏埼玉」のフレーズの下、学問の多様性を尊重しつつシナジーをもたらす「多様性と融合の具現化」をビジョンに改革を進めていきます。

2015年、埼玉大学は理学部物理学科の卒業生である梶田隆章さんのノーベル物理学賞受賞に大いに沸きました。役員も、教員も、職員も、学生も、そして同窓生も、全員がその快挙を大変嬉しく思うとともに、埼玉大学を誇りに思いました。在学中は弓道部で活躍し、文武両道を果たされた梶田さん。都会の喧噪とは無縁のキャンパスで、多様な学生と先生、多様な学問に出会い自由闊達に時を過ごした4年間で、彼を研究者の道へと導き、ノーベル賞受賞という一到達点に至らしめたものと思います。梶田さんの実直さや「地道にこつこつ」といった研究スタイルは、堅実な埼玉大学の学風そのものです。埼玉大学は、これからも、全員が目標を同じく一丸となって協働し、質の高い教育、質の高い研究、質の高い社会貢献に誇りを持って取り組んでいきます。今日、新たに埼玉大生になった皆さんもその一員です。それぞれにそれぞれの場で大いに活躍して欲しいと願っています。

私が大学生として過ごした埼玉大学での4年間には先輩、同輩、後輩といった仲間や多様な先生方など、多くの出会いがありました。中でも、恩師お二人との出会いはとても大きく、講義や卒業研究での指導、さらには日頃のお話に触発され、学問の面白さ、広がり、奥深さや大学の在り方を実感しました。お一人は最初にお話しした故 岡本舜三先生。後に世界の **Legend of Earthquake Engineering** の一人に選ばれた地震工学の世界的権威でもあり、構造物の振動現象の持つ不思議さに目覚めさせて頂きました。もうお一人は名誉教授、秋山成興先生であり、構造力学の本質を教えて頂くとともに、「君は埼玉大学に戻り、埼玉大学のために学問研究に尽くせ」と諭されました。

良き師や良き仲間との出会いの大切さについては、梶田隆章さんも指摘しています。私も学長として梶田さんのお話を伺う機会が多くなりましたが、梶田さんは、「ものすごく幸運なことに良い師、良い仲間、良い研究プロジェクトに恵まれ、その結果、ニュートリノの小さい質量を発見することができました」と語っています。そして、こう続けています。「いつ本当に人生を決めるような大切な出会いがあるか分かりません。広く目と心を開いて、大切なものに出会ったときのための準備をして下さい。」

梶田さんの言葉の中の「出会い」には、ご自身、研究者人生の大きな転機となったとする観測データとの出会いも含まれます。スーパーカミオカンデでのニュートリノの観測データに計算値とのずれが生じていることに気付き、非常に重要に感じて、このデータを解明する研究に専念し、ニュートリノ質量の発見につながったとのことでした。

この「大切な出会い」については、筑波大学名誉教授の白川英樹先生が同じように、その重要性に触れています。白川先生は、電気を通すプラスチックの発見・開発により、2000年にノーベル化学賞を受賞され、翌2001年には埼玉大学において特別講演と、当時の理学部長で、後に第10代埼玉大学長を努められた田隅三生先生との対談を行って下さっています。

(http://www.saitama-u.ac.jp/koho/intro/keyaki/2001-6/keyaki_web/taidan/01/01.html)

白川先生は、実験で間違っただ通常の1000倍の濃度の触媒を使ってしまい、その失敗が生み出した偶然との出会いを新発見に結びつけていったそうです。ノーベル賞の受賞はセレンディピティ **Serendipity**、つまり「探し求めていたわけではないが、偶然がきっかけで素晴らしい発見をする能力」の要素が大きかったとし、虚心によく物事を観察し、考察することでセレンディピティを発揮するチャンスに恵まれると話されています。白川先生は、「**“Chance favors the prepared mind.”**「機会は準備された心にもみ幸運を恵む」というパストウールの

言葉は本当でしょう」とも言われていますが、梶田先生の「広く目と心を開いて、大切なものに出会ったときのための準備を」という言葉に通じます。

見ること、考察することの重要性については、様々な識者が指摘しています。まず、ゲーテは、“Knowing is not enough; we must apply. Willing is not enough; we must do.”「知るだけでは不十分、知の活用が必要。意思だけでは不十分、実行が必要である。」とした上で、“Thinking is more interesting than knowing, but less interesting than looking.”「考える事は知ることよりおもしろい。しかし、見ることには及ばない。」と、思考以上に見ることの重要性について言及しています。ただ、ゲーテは同時に、“We only see what we know.”「われわれは知っている物しか目に入らない。」とも言っており、「見ること」の難しさも指摘しています。

この「見ること」の大切さと難しさについては、解剖学者、養老孟司氏が著書「文系の壁」(PHP 新書、2015 年)の中でも触れています。科学者は感覚でとらえたものを意識化しますが、感覚でとらえる段階で、すでに自分のフィルターがかかっており、目の前に見えているのを見ていない、自分が見たいものだけを見てしまうことを指摘しています。そして、科学に限らず、頭で考えると煮詰まるから、感覚を開くため、煮詰まる前にフィールドに出てものを良く見るのが重要であるとしています。

養老氏は、もう一つの著書「「自分」の壁」(新潮新書、2014 年)の中で失敗についても触れています。つまり、人はなにかにぶつかり、迷い、挑戦し、失敗し、ということを繰り返すが、そうやって自分で育ててきた感覚のことを「自信」と言うとして、失敗の重要性を指摘しています。

また、東京大学名誉教授の畑村洋太郎氏は、長年読み続けられている著書「失敗学のすすめ」(講談社文庫、2005 年)において、人は失敗から学び、さらに考えを深めていくとして次のように述べています。「成功例に学ぶというのは、一見すると誰の目にも賢いやり方に思えるはずである。それなのになぜうまくいかないのだろうか。その理由は簡単である。お手本を模倣することでうまくいくと考えている人の多くは、やがてそれ以外の方法について「見ない」し「考えない」ようになる。・・・時代は常に変化しているので、あるときの「いいやり方」がいつの間にか「ダメなやり方」に変わるといえることが必ず起こるからである。」そして、次のように続けています。「なにかしらの目的意識を持った人が、実際の体験の中で、自分自身でなにかを感じたり、自分の頭で主体的に考えることこそが大事で、そのように行動している人だけが、どんな状況にも柔軟に対応できる本当の知力、本当の知識といったものを体得できるのではないのだろうか。実はこれが、失敗学の根本にある考え方でもある。人間がなにか新しいことをしようと行動すれば、その結果はまずまちがいで失敗に終わる。しかし、その失敗自体は悪いことではなく、その経験の中で自分が見たこと、感じたこと、考えたことは必ず次に役立つ。」やはり、見ること、考察することの重要性につながっているのです。

ところで今年1月、第5期科学技術基本計画が閣議決定されました。これまでの基本計画と違い、科学技術イノベーション政策を前面に出し強力で推進するというものです。イノベーションは文系、理系を問いません。この基本計画には以下の記述があります。「近代科学が産声を上げた17世紀、科学者ボイルが記した未来予測には、今日で言う生体移植や衛星測位

システムなどが登場する。その実現には長い歳月を要したが、近年の科学技術、とりわけ情報通信技術の発展は、瞬く間に経済・社会のルールを変化させ、人々のライフスタイルや、社会と人間の在り方にも影響をもたらしている。今やイノベーションは、これまでの延長線上ではないところに発現し、瞬時に世界に拡散するようになっている。」

この情報通信技術、つまり **Information and Communication Technology, ICT** の発展を受け、第5期科学技術基本計画では「世界に先駆けた『超スマート社会』の実現」を掲げています。そして、人とロボットや人工知能、つまり **Artificial intelligence, AI** との共生が超スマート社会の姿としてイメージされています。その **AI** に関して、先日、衝撃的なニュースが流れました。それは、当分の間は **AI** に人間の頭脳が負けることはないと言われていた囲碁で、世界でも屈指のプロ棋士が **AI** に1勝4敗で負け越したというものです。まさに、イノベーションは、瞬時に世界に拡散するようになっており、社会には多様な価値観が生まれます。その社会の持つ多様な価値観を享受するには、柔軟性と受容性が不可欠です。今後、人間は、自らは思いつかなかった枠組みを **AI** から学ぶことで、自身の知能を高められる可能性があります。やはり、人間は実体験の中で、よく見て、良く考えて、自ら学び続けることが大切なのだと思います。

梶田さんの言を借りれば、大学は学問の入り口であり、皆さんにはこの時、この4年間を大切にしてほしいと思います。そして、失敗を恐れることなく、誇りと勇気を持って何ごとにも挑戦してほしいと願っています。物事をよく見ること、よく考察することを常に心掛け、大切な出会いやセレンディピティの発揮のチャンスを逃さないようにして下さい。さらに、どんな状況にも柔軟に対応できる本当の知力、本当の知識といったものを体得して下さい。皆さんの、埼玉大学での活躍を大いに期待しています。

今日の入学式では、特別講演として、独立行政法人国立女性教育会館の理事長でいらっしゃる内海房子様にお話し頂きます。演題は「若いみなさまとともに創る男女共同参画社会」で、ダイバーシティ **Diversity** についてのお話しです。ダイバーシティとは性別や人種の違いに限らず、年齢、性格、学歴、価値観などの多様性を受け入れ、広く人材を活用しようとするマネジメントのことです。多様性を積極的に受容しようとする埼玉大学にあって、内海様には、ご自身のキャリアを含め、男女共同参画社会について熱く語って頂きます。新埼玉大生の皆さんの38%が女性です。この特別講演が、皆さん全員にとって、埼玉大学における最初の、素晴らしい出会いになるものと思います。

さあ、新たな時間軸の始まりです。大学での生活は皆さんの長い人生の中でとても重要な時期、しかも時間軸原点からの限られた最初の4年間です。皆さんが、多様な学問や人との出会いをはじめ様々なことに触発され、時間とともに目的意識をより一層明確にして充実した大学生活を送り、さらに成長して行かれることを最後に祈念して、私の式辞とします。

平成28年4月8日

埼玉大学長 山口宏樹